

遺伝子異常加齢で増

食道がん 飲酒・喫煙が促進

京大

食道がんを引き起こす恐れがある遺伝子の異常促進されることが食道上皮の遺伝子解析で分かった。チームが2日付の英科学

誌ネイチャー電子版に発表した。

小川教授は「加齢とともにがんになる人がなぜ多くなり、飲酒や喫煙がそのリスクをいっ高めるのかを解明する重要な手がかりとなる成果だ」としており、早期診断や予防につなげたいという。

チームによると、がんは、細胞の特定の遺伝子に異常が生じ、増殖することで発症する。加齢に加え、生活習慣によってリスクが高まるとされるが、詳細なメカニズムは分かっていない。

チームは、発がんに先立って起きる遺伝子の異常を調べようと、20〜80代のがん患者や健康な人計約130人の正常な食道上皮を採取し、解析した。その結果、患者、健康な人を問わず、正常な細胞であっても、食道がんで頻繁に見られる遺伝子異常が加齢に伴って増え、過度の飲酒や喫煙歴があるとさらに増加する傾向にあった。

こうした異常を持った細胞は、70歳以上の高齢者では飲酒や喫煙の有無にかかわらず、食道全体の面積の40〜80%に拡大していることも判明。異常は生後間もない時期に生じていた場合があることも分かった。